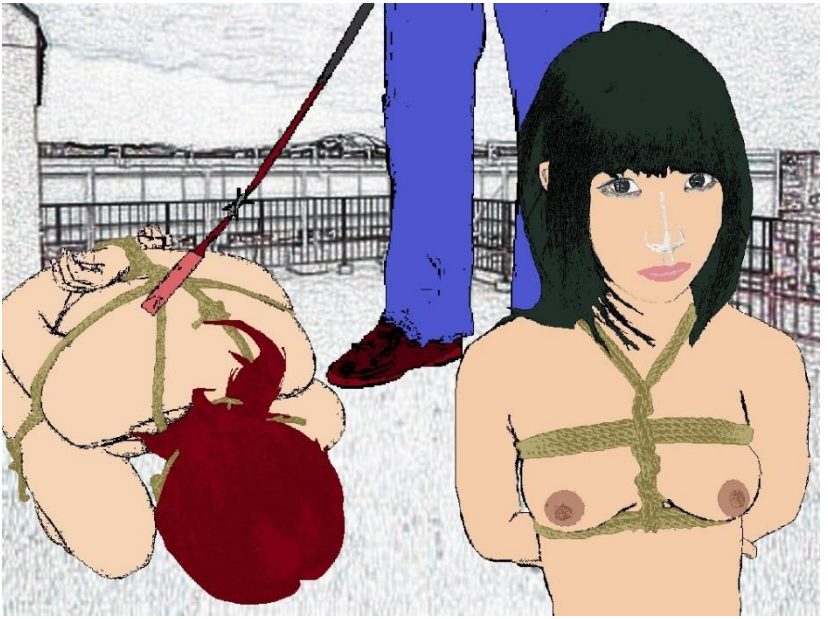
Family SM triangle

Side:Papa



Horikado Nagayasu

目次

１．マンネリプレイ ..... - 3 -
２．メール調教 ..... - 36 -
３．マゾ娘の正体 ..... - 46 -
４．褌あれこれ - 55 -
５．本気の調教 - 79 -
６．リアル調教 - 98 -
７．屋外調教 - 185 -
８．遊園地 - 225 -
９．三角関係の始まり - 245 -
後書き - 272 -

１．マンネリプレイ

ピンポーン。

インタホンのモニターを見るまでもない。エントランスのオートロック『６９＋呼出＋６９６９＋呼出』と押すのは妻の萌恵（もえ）しかいない。

いちおうは、モニターで姿を確認する。股下五センチのフリルミニスカにノースリーブのブラウス。気合がはいっている。

私も気合を入れて。一番下の抽斗を開けて、浣腸と麻縄と鞭を確認しておく。

五分ほどで、ペントハウス――というほど大仰ではなく、屋上に設置されたプレハブ小屋のドアが開く。私はわざと知らんぷりでパソコンに向かい続ける。

ほう。『メール調教のお願い』か。久しぶりだが、まあ期待はできないだろう。

「旦那様、モエをかわいがってください」

旦那様という呼び掛けは、ＳＭプレイのときに限ってのことだが、結婚したときから使わせている。せいぜい二時間かそこらの間だけでも、彼女の『御主人様』になった男は数多くいる。差別化というわけだ。

私は、土下座して額を床に擦りつけているマゾ牝を振り返った。

「お言いつけのとおりに、長袖とパンツの着替えを持ってきました」

手足に縄や鞭の痕が残っても、外を歩ける。三十代ともなると、少々のマッサージではプレイの痕がすぐには消えないが、今夜は弥愛がクラスメートの家でパジャマパーティー。私もモエも、久しぶりに気合がはいっている。

「立て」

間近に見ると、ずいぶんくたびれたブラウスとスカートだ。肌の露出よりも、こんなボロを着て外を歩く方が羞恥プレイじゃないのかと思ってしまう。が、モエの意図はよくわかった。

予定は変更。縄ではなく手錠にする。

私は無言で手錠を取り出して、モエの左手に嵌めた。両手首を背中にまわさせて、後ろ手錠に拘束する。

こういったとき、いろいろと言葉責めをする者もいるが、私は苦手だ。そしてモエは、M嬢として客のプレイスタイルに合わせるように最初から躾けられていたし、結婚してからは私ひと筋。のろけになるが、すっかり私色に染め上げられている。

私はモエの正面に立って、ブラウスの襟首に手を掛けた。

びりりりっ……

無言で引き千切る。

「きゃあっ……ひどい」

期待していた通りのことをされて、それなのに本気のように聞こえる。女は生まれながらの女優だと感じ入る。のは、後回しにして。

ブラジャーも、よれよれ。縁の糸がほつれている。しかし引き千切るのは無理なので。

ストラップをずらして、そのまま引き下げた。
「いやあ！　羞ずかしい」
　背中を向けてうずくまる。
　スカートはホックをはずして、ふつうに脱がせて。ショーツは抽斗からカッターナイフを取り出して、切り刻んでから引っぺがす。
「素っ裸になったところで、もうすこし愉しませてもらおうか」
　うずくまったままのモエの首に、大型犬用のごつい首輪を巻き付ける。背中越しにＤカップの乳房を両手で鷲掴みにして引き上げた。
「そら、立て」
　靴下を穿いたままの足を股間に差し入れて持ち上げる。足の甲に、湿った感触が伝わる。
「いやあ……」
　というのは、もっとひどくても大丈夫だという意味なので。
「逆らうと泣きをみるぞ」
　右手を乳房からはなして、クリトリスをまさぐる。すでに固く尖っているそれを摘まん

で引っ張る。
「痛い、痛い……」
　本気で痛がって、モエがようやく立ち上がった。
　私は首輪に長いリードをつないで、モエを外へ引っ張り出した。屋上の向かい側にある給水塔へ引っ張ると、最初は素直に歩いたのだが、ペントハウスの陰から出たところで立ち止まった。
「まだ逆らうつもりか？」
「でも、看板がはずれて……います」
　素の声だったが、言葉づかいは旦那様に対するそれを残していた。
　収入の足しにと、このビルの屋上には広告の看板を張り巡らしてある――というのは、管理会社への建前で。実は、疑似屋外プレイの舞台装置だ。
　ところが今日は、わざと一枚だけ取り外してある。もっとも、給水塔からは遠くの山並しか見えないし、途中の動線上から見えるの

も遠くのビルだけだ。何時何分に裸の女がそこを通るとわかっていても、はたして双眼鏡で発見できるかどうか――などと、モエを安心させたりはしない。
「フィットネスでシェイプアップした自慢のボディだろ。見てもらいたくてうずうずしてるんじゃないか？」
　ほっと、モエの顔に安堵が浮かんだ。
「はい、旦那様がお望みでしたら」
　羞ずかしそうに――といっても、羞恥に悶える風情でもなく、私に近づく。
　気合を入れ過ぎた。慣れない言葉責めを試みて、かえって心の裡を見透かされたようだ。
　給水塔の前に立たせて、リードを鉄脚の上のほうに結んだ。
　モエは後ろ向きになっている。八十八センチのヒップは綺麗な逆ハート形。六十センチのウエストには、だぶつきの気配すらない。
「こっちを向け」
　モエが無言で向きを変える。後ろ手錠に拘

束してあるから、どこも隠せない。
　八十六センチのＤカップは、さすがにすこし垂れているが、子供を母乳で育てたことを考えれば、じゅうぶんに美乳だ。下腹部も引き締まっている。そして、盛り上がった土手からは色の濃い小淫唇が二センチほど垂れている。
　そして、飾り毛は一切無い。定期的に私が剃っているのだが、自分でも抜いているので、１０年前に比べると地毛もずいぶん薄くなっている。
「そこで待っていろ。向きを変えるなよ」
「……はい」
　うつむいて、つぶやくような返事。モエの言い分だと、こんなふうに自分の意志で露出しているほうが、大の字に磔けられるより羞ずかしいそうだ。磔なら、もしも誰かに見られたとしても――痴女ではなく、サディストに虐められている被害者だと思われるからだそうだ。

その羞ずかしいポーズを命じておいて、私はペントハウスに引き返した。

わざと鞭を置いてきたのは、モエへのサービスだ。屋外だから、蝋燭はないだろう。道具を取りに戻るのだから水責めでもない。鞭か、針か、浣腸か――と、サスペンスを味わわせてやっている。

「怖い……」

私が手にしている鞭を見て、モエの顔に脅えが浮かんだ。もちろん、鞭の威力は知り尽くしている。

バラ鞭だが、一本ずつを革で編み上げてあるので重量がある。渾身の力で鞭打っても肌が裂けたりはしないが、三日くらいは痕が消えない。

「正面を向いていろよ」

鞭を水平にピンと張って、乳首をしごいてやった。すでに充血している乳首が、いっそう固くなる。

「十発の数え打ちだ。間違えたら五発ずつ増

やして、最初からやり直させるぞ」
「はい、頑張ります」
　無毛の股間に指を突き立てて、まだじゅうぶんに濡れているのを確認しておく。
　二歩下がって、鞭を構えて。
　バッシャン！
　七割くらいの力で水平に薙ぎ払った。乳房がひしゃげと横へゆがみ、ぷるんと元に戻った。
「ひとつ……」
　バックハンドは威力が落ちるので全力。
　バッシャン！
「ふたつ……」
　六発で小休止。すでに乳房は全体が赤く脹れて、いっそう鮮やかな筋が無数に刻まれている。
「すこしはこたえたようだな」
　縮こまっている乳首をつまんで、指の腹で転がす。
　自分で書いている小説なら、思いきりつね

るかねじるかするところだ。ヒロインが本気で厭がって泣き叫んでも、サディストは容赦しない。

いや、現実でも。本気で泣き叫んでもけっして手加減しないでください――というマゾ女もいる。私は、過去にそういう女を三人は知っている。それで悦虐に至ったのはゼロ。初心者にありがちな、観念マゾというやつだ。もっとも、一人だけは再度のプレイを望んだから、彼女は真正ドMだろう。残念ながら、裏を返す前に別のパートナーを見つけて、それきりになってしまったが。

モエには、そこまでのM性はない。そもそも、手加減無しのプレイを望まない。本人はM１００％のつもりだが、私の感覚ではM７０％といったところか。

とはいえ、キーワードを嫌うのは、私と同じだ。

厭だ痛い赦して耐えられません――なにを泣き叫ぼうと、サディストは無視する。しか

し『お慈悲を願います』には、責めを緩める。『お赦しください』と言われたら、その責めを打ち切る。

キーワードは、人それぞれだ。『ストップ！』なんて無味乾燥なのもあれば、サディストに名前で呼びかけるというのもある。私たちが使っているキーワードは、モエがアルバイトをしていた『砂糖と蜜の店』から引き継いだ。

キーワードを決めておけば、責める側としては言葉の裏を斟酌しなくていいのだから楽ではある。

しかし責められる側は、もう限界だと思ったとき、キーワードをみずからの意志で封印しなければ壁を突破できない。

モエにはそこまでのマゾ性向が無いし、それでも（ある程度は）厳しい責めを望む程度にはマゾだ。

指の刺激で乳首がふたたび勃起したのを見計らって、私は鞭打ちを再開した。

バッシャン！

「ななつ……」
　モエは正確に数えた。わざと間違えて鞭をおねだりする余裕はないというわけだ。
　とはいえ、責める側が相手の限界を低く見積もっては、かえって可哀想というものだ。
　十発の乳房打ちを終えて、私は次の命令を与える。
「脚を開け」
「あああ……」
　悲しそうに呻いて、モエは逆に太腿をぴたっと閉ざした。赦しを願う言葉は口にせず、うなだれて、憐れみを乞う眼差しを向けようともしない。まだまだ、無慈悲に責め嬲られるのを持ち受けている。
　私は鞭の柄を、強引に太腿の間に押し込んだ。ぐりぐりとえぐって、裏へ貫通させて、鞭の両端を握って引き上げた。小淫唇を割って、鞭が股間に食い込む。
「素直に脚を開け」
「厭です。開いたら、そこを叩くつもりなん

でしょう？」
　私は黙って、いっそう強く鞭を引き上げた。そして、前後にしごく。
「きひい……」
　初めての、切迫したか細い悲鳴。
　最後にこの鞭を使ったのは三か月前。そのときも、ここで泣きがはいった。そして、膝を震わせながら脚を開いた。それは、今日も同じだった。
「そんなに後じさるな。もっと前に立て」
「そんな……ひどいです」
　甘えた響きを残した抗議の声。モエは、半歩ほど前に出た。
「これは数えなくていいぞ。五発を耐えきったら褒美をやる」
　褒美がちっとも褒美でないことは、私もモエも知っている。
「そらっ！」
　気合声というよりは、モエを励ます（あるいは脅す）意味の掛け声。

ビャシャン！

水平に振り抜くのではなく上へ振るのだから勢いは弱い。しかし、半歩前に立ったから、鞭の先端が鉄脚に当たらず、跳ね上がって肛門まで叩く。

「ひいいっ……！」

本気の悲鳴だが、まだ大丈夫。

ビャシャアン！

腕を止めずに振り抜いた。

「きひいっ……痛い！」

痛みが悦虐を大きくうわまわったようだ。

三発目は手加減をして、鞭が当たった瞬間に手首を返した。

パシャン！

「あうう……」

パッシャン！

「ひいい……」

五発目は、これが最後とばかりに大きく振り抜いた。

ビャッシャアンン！

「ひぎゃああっ……！」
　雑じりっけなしの悲鳴を吹いて、がくっと膝が崩れる。
「よく耐えたな。しばらく休ませてやる」
　給水塔の鉄脚に吊るした裸身をしばらく鑑賞してから、私はペントハウスに引き上げた。

　煙草を点けて。
　調教依頼メールは、萌恵を帰してからじっくり読むとして。とりあえず副業を片付ける。
　絵師のひとりから、構図についての質問が来ていた。私としてもすぐには決められないので、つぎのメール。は、販売サイトからの事務連絡。キャンペーンの案内。これは機械的に処理して。
　幾つものサイトであれこれ販売していると、雑務もそれなりに多い。しかし、これも収入のためだからおろそかにはできない。
　私は『出電伝出流（デデンデンデル）』というサークルを主催して、絵は上手いがストーリーが苦手という

絵師を何人か集めている。私がストーリーの作成と電子出版の庶務を引き受けて、原作料と事務費とで売り上げの三分の一を取っている。月に三十万円の稼ぎだ。これが軌道に乗ったから、勤めていた会社が傾いたときに希望退職に手を上げた。

割増の退職金で家のローンは繰上返済したが、年収三百万かそこらでは、人並みの生活は出来ない。フリーランスでサラリーマン時代と同水準の生活を維持するには、二倍以上の収入が必要といわれている。

それは無理としても。ローンを組んで中古の賃貸マンションを購入して、管理は業者に委託して。その賃貸マンションのバランスシートが安定すれば、それを担保に次のローンを組んで。今では三棟を所有して年に二百五十万ほどの純手取りになっている。

ただしローン総額は一億円を超えているから、自転車操業もいいところ。稼働率を上げるためには、このプレハブ・ペントハウスも

貸し出したいくらいだが、書類の上ではこんな屋上屋を重ねた工作物は存在していない。

どのみち、給排水設備がないから居住には適さないし、屋上から転落でもされたら建物全体が事故物件扱いになるしで、賃貸の対象にはできない。資産価値はゼロだ。

しかし、サークルの拠点には使えるし、ＳＭプレイにバストイレは不可欠ではない。

おっと。いつの間にか二本目の煙草が立ち消えている。モエとしては、鞭打ちの痛みの余韻をじゅうぶんに愉しんで、つぎの責めを待ち焦がれている頃だろう。

せっかく着替えを持参しているのだから、たっぷりと縄痕も着けてやらなくては、後で恨まれる。それと、約束した褒美と。

私はモエを鉄脚吊りから解放して、コンクリートの床面に敷いたブルーシートの上にひざまずかせた。首輪をはずし、手錠もはずす。

が、モエも心得たもので、後ろにまわした

手はそのままに、じっとしている。
　その手首を水平より高くねじ上げて、二つ折りにした縄で縛り、縄をまわして乳房の上を縛る。手首から横に伸びている縄に絡めて折り返して、乳房の下を縛った。余った縄尻を腋の下に通して上下の縄を引き絞り、背中で水平に渡して反対側も同じようにして、最後に手首へ戻して逆三角形を形作った。短めの縄で首を巻いて前に垂らし、上下の縄を乳房の谷間でひとまとめにして、これもきれいなＶ字形になるよう、首まで戻す。
「くうう……苦しい」
　本気の呻き声だ。キーワードを使わないのだから――その言葉が本心なのか悦虐なのか、正しく聞き取る能力を要求される。ほかの女性ならともかく、十四年も（日常もプレイも）連れ添った妻の心は、それなりにわかっているつもりだ。
「そこに座れ」
　モエは正座ではなく三角座りをした。

私はモエの膝を割って足首をつかんで胡坐を組ませた。
「え……？」
予想していたパターンを裏切られて、戸惑いと期待の綯い混ざった声をあげるモエ。
モエの足首を引き上げて反対側の太腿に乗せる。これだけでも自分では手を使わないとほぐせないのだが、重なった脛を縛って、縄尻を首にまわして引き絞る。状態が前に倒れていく。
「く、苦しい……」
このまま限界まで身体を折りたためば海老責めだが、モエはそれに耐えられない。今の私の目的にもそぐわない。四十五度まで傾いたところで縄留めをした。
「それでは、約束した褒美の下準備だ」
「ちゃんと、お浣腸はすませてきました」
そんなことだろうとは思っていたが、聞く耳は持たずに、前へ押し倒す。モエの身体は大きく開いた膝と頭の三点で支えられて、尻

を高く突き出す形になった。

給水塔横の水栓を開けてホースに水を満たしてから、ノズルをモエのアヌスに差し込んだ。

「く……あああ」

モエの腸に勢いよく水が流れ込む振動が、私の手に伝わる。給水塔からの水圧だけでは弱いので、モエのためにわざわざ加圧ポンプを増設してある。ごくたまには、自分に使うこともあるが。

メール調教からリアル調教に発展したときには、ＳＭ設備のあるホテルを利用して、ここは使わない。個人情報を与えないという目的が第一だが、萌恵への貞節でもある。

水浣腸は少なめ（といっても一リットルは入れた）にして、アナルプラグで栓をする。

前に手を差し込むと、じゅうぶんに濡れていた。

萌恵は学生時代に処女のままＭ嬢のアルバイトをしていた。本格派のサディストの中に

は、ＳＭと挿入とは別物だという者もいるが、ＳＭクラブの客のほとんどは、最後には射精を望む。萌恵はイラマチオとアナルとで対応していた。膣性感の前にアナル・エクスタシーを覚えたほどだ。

だから、アナルＳＥＸはモエにとって最高の褒美ということになるのだが。それはお預けにしておいて。

私も裸になって、モエの膣に生挿入した。

「あああ……んん」

蕩けた声は演技ではない。モエの処女を（半ば以上は合意で）奪い、膣性感を開発してきた私だから断言できる。

五分ほどアイドリングを続けて、私は立ち上がった。モエの身体の向きを変えて。

「今日は噴水にするぞ」

「ええっ……厭です。いつものようにさせてください」

いつものように――とは、屋上の外周に切られている排水溝にしゃがんでの排泄だ。排

泄のシーンそのものは、かつては十人以上の客に見られているし、今も定期的に私の目に晒している。しかし、座禅転がしのままの排泄となると、たしか三年ぶりだと思う。
「どうしても厭なら、足をほどいてやってもいいぞ」
　ほうっと溜め息を吐くモエ。安堵が半分と落胆が半分。
「ただし、あと三十分は放置してからだ。今すぐ出したいなら、噴水だ」
「ひどい……」
　萌恵は、しばらく考えていた。
　モエは苦痛には弱いが、浣腸の苦しみだけは別だ。一リットル程度の水浣腸とアナルプラグなら、悶え苦しみながら、それを私に見られて羞恥を掻き立てられながら、存分に被虐を堪能するだろう。
　しかし、アヌスから水を噴き上げるのは、通常の排泄を見られるより、ずっと羞ずかしい。そして、三十分もお預けを食わないです

ぐに褒美をもらえる。
「……旦那様の望まれるようにしてください」
　狡い返事だ。しかし私としても、三十分のお預けは望まない。
　私はモエの横に膝を突いて、一気にアナルプラグを引き抜いた。
　ぐぼっ、ブジャアアアッ……
　一気に水が噴出して、私の予測を超えて看板の裏にまで飛んだ。
「あああ、羞ずかしい。お願いです、見ないでください」
　こういうのを反語表現という。
　ビチ、ビチチと小さな音を立てて、さらにモエは水を絞り出す。
　それも止まったところで、水栓を全開にして、モエの身体を洗ってやった。水責めを兼ねた一石二鳥だ。
「痛い……冷たい……」
　もちろん。ポットの湯でやさしく洗ってやったりすれば恨まれるのはわかりきっている。

「しばらく、これで遊んでいろ」
　直径五センチの極太バイブを挿入して、紐で左右の太腿に結び付けた。
　スイッチ、オン。
「ああっ……あああああっ……」
　甲高い喘ぎ声。
　モエを遊ばせておいて、看板の洗浄と、床にも水を撒いて汚れを排水溝へ流す。
　そして。
「さあ、褒美をやるぞ」
　モエの後ろで膝立ちになって。半勃起しているペニスを軽く扱いて、じゅうぶんに硬くしてから、ずぶうっと突き挿れた。腸内からの分泌で濡れているから、あらためての潤滑は不要だ。
「はああ……ふうう」
　ありていに言って、私のペニスはアナルプラグに負けている。しかしモエにとっては、『旦那様に犯される』という充足感は、器具では得られない。

アヌスは肛門の締め付けはきついが、腸の内部は緩い。その気にならず、浅い挿入で亀頭を刺激しないように注意していれば、そこそこ荒腰を使っても持久できる。

一方でモエは。アヌスを刺激されると同時に前では極太バイブが暴れている。

「う゛あ゛あ゛っ……逝く逝く逝くう……あ゛あ゛あ゛っ！」

オクターブ低い叫びでアクメに達して。

「あ゛あ゛っ……落ちる、落ちるううう」

五分ほども絶頂をのたうちまわった。

こうなると、私も到達しないことには不完全燃焼だ。

「落ちろ、もっともっと落ちろ」

ストロークを増やしピッチを上げて。

「びい゛い゛……落ちるうううっ！」

自分の女を支配している満足とともに、私はモエのアヌスに欲望の滾りを解き放った。

とりあえずバイブのスイッチを切って。私はモエの身体を起こした。

モエはとろんとした表情で、虚空に視線をさまよわせている。

丸っこい顔が、淡いピンクのオーラに包まれている。ふだんでも泣いているような印象の目が、今は弥勒像のように細められて。肉厚のおちょぼ口は、さながらのアルカイックスマイル。けっして美人ではないが、神々しくさえ見えた。

いや、のろけが過ぎた。

モエに余韻を堪能させるべく、脛と首をつなぐ縄だけをほどき、その場に放置して、私はプレハブ・ペントハウスに引っ込んだ。

賢者タイムに新しいプロットを考える気にはなれない。とはいえ、雑務を処理する気分でもない。

欲望や邪念の消えている今は、冷静にエロチックな事柄を処理できる。ので、調教依頼のメールに目を通した。

●３歳の処女です。メール調教してもらえますか？

最初に頭に浮かんだのは『ネカマ』ならぬ『ネロリ』だった。ＡＮＤかもしれない。メール調教をして、後にリアル調教に進展して。自称年齢と暦年齢との隔絶とか、顔写真が別人のものだったりとか、いろいろと騙されたりもしたが。逆に、上乗せした年齢を、幼く拙い文章からそれと察して、君子危うきに近寄らなかったことも二度ほどあったが。ここまで堂々と年齢を書いてこられたのは、これが初めてだった。

とにかく、最後まで読んでみよう。ＷＥＢメールの捨て垢だから、九十九パーセントはネカマロリだろうが、それはそれで、『そういう欲望も男にはある』というデータになる。新しいプロットのネタになるかもしれない。

前略　名和戸武智様。

初めまして。ＨＮはラブです。

私は●３歳の●学２年生です。

勿論処女ですが、Ｈな事やＳＭに凄く興味が有ります。

匿名のメールですから、友達にも話した事の無い本心を書くと、私は被虐と云う物に、凄く憧れています。想像する理想のロストバージンは、レイプです。出来たら３人以上に襲われて、膣だけでなく口も肛門も一辺に犯されたいです。

・「犯してください」と自分から御願いするまで、縛られて吊るされて、鞭で叩かれたり蝋燭を垂らされたりします。でも、私が降参しても、猿轡をされているので、返事が出来ません。

・クラスメートが登場するので、ちょっと嫌だなあとも思いますけど、イジメでモップの柄でロストバージンさせられるのも、素敵かも知れません。

こんな事ばかり考えていますが、実行する勇気が有りません。

自縛とか自虐とかを試してみますが、乳首に洗濯バサミを付けるのは３０秒が限界でした。クリトリスは１秒で降参して泣きました。

でも、もしも、名和戸様から「これをクリアしないと、もうメール調教してあげないよ」とか言われて、厳しい課題を出されたら、きっと頑張れると思います。

洗濯バサミで無くても良いです。

針とか縄褌とかの御命令でも頑張ります。蝋燭は、部屋に臭いが籠るので困ります。

追伸

きっと、名和戸様の目から見たら、私のしている事は児戯に等しいように見えるでしょう。

でも、『マゾ妻逆調教日記』の記事を読むと、初心者にも親切で厳しい人だと思いました。

早々

名和戸武智（なわとたけとも）というのは私のＨＮだ。同人サークルの代表者はもちろん長堀門恭（ながほりひろゆき）の本名で登録しているが、ユーザーには開示していない。『マゾ妻逆調教日記』というブログも同じ。

それは、ともかくとして。

もしかすると――本物かもしれないと思った。背伸びして『おとなの文章』を書こうとしている。それでいて、作文調の言い回しがところどころにある。

では、ほんとうに●三歳の少女からのメールだとして。どうするべきか。

君にはまだ早いと諭すか、まったく無視するか。ともかく『君子危うきに近寄らず』だ。

しかし、少女はそれでは満足しない。私より質（たち）の悪いサイトに引っかかるか。ＳＭ系の出会いサイトに手を出して、とんでもない目に遭うか。だから、私がそれなりに――というのは、嘘だ。

千載一遇のチャンスと思っている。素直に、

そう認めよう。しかし……

倫理的な問題はともかく。メール調教は、淫●には該当しないはずだ。弁護士の見解をきちんと検索しておこう。

おっと、その前に。もう三十分ちかくが経った。モエを片付けなくては。

バスタオルとラジオペンチを持って、屋上へ出た。

モエが私を振り向いた。すっかり日常の顔に戻っているが、満足のオーラが全身を包んでいる。

私は黙って縄をほどきにかかった。結び目が水を吸って固くなっているところは、ラジオペンチを突っ込んで緩める。

縄を解いてやると、モエはその場にきちんと土下座した。

「たくさん虐めていただいて、ありがとうございました」

それから。立ち上がって、私に背を向けて

自分でバイブを抜いて。
「はい」
　私に差し出す。
　私は、持ってきたバスタオルを肩に掛けてやる。
「こんなにきつく縛られたのは、三か月ぶりくらいかしら」
「――だな。寒くなる前に、もう一回くらいは屋上に晒してやろう」
　給湯設備がないから、冬は腸洗滌もままならない。寒さに震える女を水責めするほど私は鬼畜ではない（と思う）し、萌恵にもそこまでのマゾ性向はない。
「看板は元に戻しておいてね」
「ほんとに、それでいいのか？」
「馬鹿……反対側のは、絶対に厭ですからね」
　反対側には、このワンルームマンションと同じ五階建てのビルが隣接している。フェンスに近づけば最上階を覗き込める。ということは、隣のビルからも屋上が見える。真正の

（たとえば夜の公園を全裸で散歩とか）露出プレイをする度胸は、萌恵にも私にも無い。
　萌恵はバスタオルに裸身を包んで、ペントハウスに駆け込んだ。
　私も後を追う。
「下着も持ってくればよかったかな」
　素肌にジーンズを穿いて厚手のシャツを着ながら、萌恵が照れ隠しに言う。
「なんだったら、バイブを挿れて帰ってもいいぞ」
「イヤよ」
　ぴしゃっとはねつけられた。ノーブラノーパンでミニスカートが、萌恵の限界だ。そのうち限界を突破させてやろうと、ずっと思ってはいるが、本気の拒絶に遭っては如何ともしがたい。
「それじゃ、帰るわね」
　お義理のキスを残して、萌恵はペントハウスから出て行った。

２．メール調教

さて、どうしたものか。もちろん、●三歳の少女の件だ。

とりあえず返事を出すとしよう。そして、初歩的な命令も与えてみよう。変にお茶を濁していては、ラブちゃんの気が変わるかもしれない。

とはいえ。ラブちゃんが実はネカマロリで、メールが晒されたときの用心もしておこう。

ラブちゃん

名和徒武智です。メールを読みました。

　きみは、Ｈなことのあれこれに興味があって、そのうちのひとつがＳＭなのかな。それとも、ふつうのＳＥＸよりもＳＭのほうに強い関心があるのかな。

　もしもＨなこと全般に興味があるのなら、ＳＭは「基本」を身に着けてからで

も遅くないし、それを強く推奨します。

それでも、どうしてもメール調教を受けたいのなら、次のメールを読みなさい。

ただし、ご主人様の命令をいただくのだから、全裸で正座して読むこと。家の都合でそれが不可能なら、最低でもブラジャーとショーツは脱いでおくこと。

これを送信。くだけた文章にしたから結語は省略。

では、つぎのメールを。

ラブへ

命令をいただく準備はできているだろうな。

課題を三つ出す。ひとつクリアするごとに報告をしてもよいし、すべてクリアしてからでもよい。

覚悟はいいな？

命令１

両方の乳首に洗濯挟みを着けて、３分

間耐えること。
命令２
　１をクリアできたら、別の日で良いから、乳首とクリトリスの３点で１分間耐えること。
命令３
　２もクリアできたら、乳首もクリトリスも輪ゴムで縛ったうえに洗濯挟みを着けて、５分間耐えること。
――――――――――
　すべてをクリアしたら、次の課題を出してあげます。クリアせずに嘘の報告をしても、こちらでは分かりません。そのつもりで。
※アドバイス
　指で輪ゴムをつまんで装着するのは難しいが、シャンプーのポンプを使えば簡単です。管の先に輪ゴムを巻いておき、ポンプで乳首を吸い出してから、輪ゴムをずらすのです。

輪ゴムの下に細い糸を通しておけば、あとではずすのが楽です。痛い思いをしたいのなら、糸を通すかわりに先端の鋭いピンセットを用意しておきなさい。

名和戸武智

これくらいなら、なんとでも申し開きができる――と思う。危険なセルフプレイはそそのかしていないし、画像を送れとも書いていない。無視するのもかわいそうだから、クリアできそうもない課題まで含めて返信した。そういうことだ。

命令２まではクリアするかもしれない。だが、命令３はずっとハードルが高い。もし本物なら、途中までの課題をクリアした証拠を自発的に添えて、ハードルを下げてくださいとか泣きついてくるだろう。万一にも命令３までクリアした証拠が添付されてきたら――生涯一度の冒険に乗り出すのも悪くない。

自宅より高額のローンを組んで賃貸マンシ

ョンの経営に乗り出したときも、失敗すれば持ち家も手放すリスクを背負っての大冒険だった。電子出版同人誌は、それほどのリスクではなかったが、その先に脱サラを見据えていたという点では、やはり冒険だった。このふたつの冒険で、勤務先が傾いた三年前、希望退職に応じることに先行きへの不安を持たずにすんだ。

十年後はともかく、二十年後も現役でいられるか自信はない。ヰタ・セクスアリスにおいて冒険を試みる、これは最後のチャンスかもしれない。

などと、一大決心をするほどのことでもないだろう。相手が●三歳の少女であろうと、しょせんはメールのやり取りに過ぎない。まさか、リアル調教にまでは進展しない。

それよりは、会社勤めをしていた当時の、擂粉木縄褌を締めてのジョギングのほうが、よほどリスクが大きかった。そんな恰好で事故に遭ったりすれば、社内スキャンダルを馬

耳東風で居座るわけにもいかない。フリーランスの今なら、娘に愛想尽かしをされるくらいですむが。

そういえば。モエにW擂粉木縄褌を締めさせて、一家そろってハイキングに行ったのは２年前の秋だったか。ズボンを濡らして弥愛に気づかれたくないと懇願されて、紙オムツを許してやった。今だったら、雰囲気だけでばれるかもしれない。試してみるわけにもいかないだろう。

たかがメール調教とか言いながら、ずいぶんと興奮している。三十代までだったら、ダイレクトに反応していたものだが。ペニスの根元が疼くだけで、それ以上の反応は生じない。やはり、最後のチャンスかもしれない。

では、大冒険の始まりを祝して。久しぶりに一人で赤提灯にでも繰り出してみるか。

まだ季節は早いが、一人鍋をつついて中ジョッキを六杯明けて。それくらいで泥酔した

りはしないが、さすがに帰宅したらバタンキューで。
　目が覚めるなり、頭の痛くなる相談を持ち掛けられた。
「ねえ、パパ……」
　これが『門恭さん』だったりすると、ちょっと待て、トイレに行ってくる――なのだが。ＳＥＸの途中で尿意がつのってはシャレにもならない。
「なんだ……？」
「弥愛のことだけど。ＳＭとかに興味があるみたい」
　これが世間一般の父親だったら、あわてふためくところだろうが。初潮が来たとき、私は娘に言い聞かせてある。
「朝帰りするときは、きちんと連絡すること。妊娠にだけは気をつけなさい」
　だって、そうではないか。身体が男を受け挿れる準備が整って、好奇心がもっとも旺盛で性欲もこれから募る一方。無理に矯める必

然性を、私は見出せない。
「蛙の子は蛙――かな」
「んもう。ふざけないで。あの子、ロープとか洗濯挟みとか、それとピンクローターも隠してるんです」
　洗濯挟みだと？
　もちろん、萌恵がどういう文脈で話しているか明白だ。洗濯挟みをどこにどう使うか、ネットで覚えるまでもなく、自然と思いつく。そして、容易に堂々と購入できる。
　私がぎくっとなったのは、偶然の一致についてだ。ラブちゃんも●三歳。洗濯挟みに挑んで挫折している。
「あいつも、もう●三か。色気づいてもおかしくない年頃だ。しかし、洗濯挟みはともかく――ロープねえ」
　自縛遊びは事故の危険がある。ほどけなくなるだけなら、親に見つかって死にたくなるくらいですむが。首に絡まって窒息とかは、ほんとうに死んでしまう。

「さいわい、洗濯ロープは、ほとんど使った様子がないみたい。でも、いずれは……」

自縛といっても、胴や足を縛っているぶんには、たいした危険はない。手首だって、そこだけを縛るなら、せいぜい親に見つかるところまでだ。しかし、ネットにあふれている画像みたいに、首縄を掛けてそこから腕を吊るしたりすると、一気に危険性が跳ね上がる。

とはいえ。実際問題としては、交通事故や部活中に死亡する生徒のほうが、圧倒的に多い。もちろん、本格的な自縛遊戯にまでのめり込む者はごく少数だから、分母も圧倒的に小さいのだが。

「手錠なら危険性はぐっと減るが、まさかプレゼントしてやるわけにもいかんしなあ」

「真面目に考えてください」

「俺は大真面目だよ。ＳＭごっこをやめろとは、俺たちに言う資格はないし、品行方正な父母でも、娘に面と向かってそんなことを言えば――控え目に言って、収拾がつかなくな

る」
「そうねえ……」
　いっそ、萌恵とまとめて弥愛にも正しいＳＭプレイを教え込んでやるか。ちらっと、そんなことを考えたが、もちろん冗談でしかない。冗談でしかなかったはずだが。

３．マゾ娘の正体

火曜日。いつものように朝の九時に『出勤』して、まずはメールをチェック。万一娘が覗き見したときの用心で、自宅のパソコンでは名和戸武智関係のデータは扱っていない。

休日が描き入れ時の絵師からの業務連絡が十幾つと、一見（いちげん）や馴染みのユーザーから何通か。そして、ラブちゃん――●三歳のメール調教志願のマゾ初心者。

命令３をクリアできませんでした

軽く驚いた。メールを出したのが土曜日の夕方。一昨日と昨日で命令１と２を（ほんとうに）クリアしたのだとすると――たいしたものだ。動画ファイルが添付されている。ああいう書き方をしておいたから、賢い子だったら文面の裏を読んでプレイの自撮り画像でも送ってくるかと思っていたが、動画とは気

合が入っている。

とりあえずは、本文から。

御主人様（名和戸武智様）

ラブです。

御主人様に頂いた御命令に挑戦しました。１は余裕でしたので、最後の１分にクリトリスを追加しました。これで、２をクリアした事になりますよね？

一休みしてから、命令３に挑戦しました。輪ゴムは、御主人様のアドバイスに従って、上手く巻き付けられました。凄く痛かったけど、耐えられました。クリトリスは、快感もありました。

洗濯バサミは、乳首はギリギリ我慢できそうでした。でも、クリトリスは瞬間的に降参してしまいました。

クリアしたのと出来なかったのと、どちらも動画を添付します。

このままでは、何度挑戦しても命令３

はクリア出来そうにありません。そこで思ったのですが、もしも後ろ手に縛られていたら、洗濯バサミを外したくても外せません。

私は、自縛にも挑戦しています。胴体の亀甲縛りとか股縄は、そんなに難しくありません。でも、後ろ手緊縛は無理です。ロープを８の字に捩じっておいて、そこに両手を入れて何度も捩じると、それらしくはなります。でも、すぐに縄抜け（？）出来てしまいます。

複雑な手順を解説しているサイトも見ましたが、後でちゃんと解けるか自信がありません。

もしも、簡単に出来て、しかも確実に解けるが手間が掛かるような方法を、御存知なら教えて下さい。

クリトリスに洗濯バサミを付けてから、大急ぎで後ろ手緊縛をします。そしたら、嫌でも課題をクリア出来ると思います。

折角与えて頂いた御命令をクリア出来ませんでしたが、どうか、ラブを見捨てないで下さい。

もっと苦痛に耐えられる立派なマゾになるよう、頑張ります。

早々

なんと、一日で全部を一気に試みたとは。

では、動画のほうも見てみよう。

……？

……！？

……！！

……！！！

なんてことだ。固定したカメラの前であちこち動いているから、裸身だけでなく顔まで写り込んでいる。

見間違うはずがない。これは、娘の弥愛だ。

呆然自失、錯乱狂気――しなかったのだから、私もたいしたタマだ。

まず。返信を出さなかった場合を考えてみ

よう。これだけ実行力のある娘だ。他のサイトでメール調教をしてくれるところを探すだろう。●三歳の少女の願いに応じる奴など、鬼畜に決まっている。

もちろん、私は鬼畜だ。Ｓ８０％＋Ｍ７０％の鬼畜だ。

私以外の鬼畜が、それでもメール調教にとどまっていれば良いが、娘からお願いするか、男から誘いをかけるか、いずれリアル調教に発展するに決まっている。私がそういう下心を持っていたのだから、断言できる。威張って言うことではないが。

お説教の返信を出しても、結果は同じだ。

悪い遊びをやめないと、この動画を晒すぞ――などというのは、説得力が無い。ラブの個人情報を知らない名和戸武智には、彼女がＳＭごっこをやめたかどうか、知りようがないのだから。

となると。致命的な事故を起こさないようなプレイでメール調教を続けていくしかない

のかもしれない。

いや、思考の順序が実は逆だ。メール調教を続ける決心は、最初からついている。それを正当化する屁理屈をこじつけていただけだ。

これが、我がキタ・セクスアリス最後の大冒険だ。もっとも。娘には小学生の頃から今までに『一生一度のお願い』を三度もされて、すべて叶えてやっているから。その伝でいくと……そのときは、そのとき。七十代の現役も珍しくはないし、萌恵がＭ嬢のアルバイトをしていたクラブには八十代の会員もいた。

いや、話が脱線した。

問題は、いずれはリアル調教に発展する可能性を、私が考えていたということだ。

そうなると、冒険どころでは済まない――だろうか。たとえば、萌恵とのプレイが最初はそうだったように、ＳＥＸを伴わなければ、社会的に非難されるべき犯罪だったとしても、私個人の倫理観に照らせば、ぎりぎりセーフなのではないだろうか。

私がＳＭ小説で書いているような行為は、長堀門恭としては忌避する。権力や金力で、無垢で無辜の少女を監禁・調教・拷問するような行為は。それでも、名和戸武智が描くヒロインは、ほとんど例外なく被虐願望を秘めていて、自分ではそれと気づいていないマゾ少女だ。

また話がそれかけている。

要するに、援助交際をする少女たちと同じ文脈なのだ。当人同士が望んで、合意のうえで行なうのであれば、どこが悪い。誰にも迷惑をかけていない――という。

判断力に乏しい若年者をそそのかしてはいけないという理屈があるのは承知している。しかし、私の目から見れば、無分別な人間は何歳になっても無分別だ。一定の年齢で線を引くのは、管理の問題に過ぎない。

――と、自分を（強引に）納得させておいて。私はラブへの調教メールにとりかかった。

メール調教奴隷ラブへ

良く頑張ったな。まずは褒めてやろう。

後ろ手に縛ってしまえば、命令３もクリアできそうだという願いも、叶えてやろう。

ラブは、タイマー式南京錠を知っているか。セットした時間が過ぎるまでは絶対に開けられない。通販サイトで、３千円くらいで売っている。

準備するものは、短い鎖を付けた小型犬用の首輪が二つだけ。

ラブは賢いから、もうわかっただろう。両方の腕に首輪を巻き付けておいて、洗濯挟みで自分を虐めたら、すぐ後ろ手になって左右の鎖を南京錠でつなげ。

縄のように肌を締めつけないから、自縛遊びをしているラブには物足りないだろうが、時間がくるまで絶対にほどけない拘束だ。

念のために、前手縛りで試して、要領

がわかってから後ろ手にすること。それも何度か練習してからだと、洗濯挟みのときも素早くできる。

　では、今度こそ課題をクリアするように。

名和戸武智

ＰＳ．ラブは、勝手に私のことを御主人様と決めたようだが、それなら、私以外のサディストとは連絡を取らないこと。ただし、学校生活でボーイフレンドを作ったり、ノーマルな恋愛をしたりすることは禁じない。

　さて。ここまでは、娘と一緒に風呂にはいって、男性機能の実際を見せてやる実践的性教育の範疇だと思う。そういう性教育が現実に存在するかどうかは知らないが。